

[シンポジウムⅡ]

院生自主企画・NPOと行政の協働を考える

—NPO・地方行政研究コースの院生からの発信—

シンポジスト 法学研究科

藤野 正弘

シンポジスト 法学研究科

藤井真知子

シンポジスト 法学研究科

大和 誠

コーディネーター 経済学研究科

平尾 剛之

ゲスト・コメンテーター 関西国際大学客員教授・元ホンダオブアメリカ副社長

網野 俊賢

総合司会 経済学研究科

市田 昌一

開催にあたって

市田 龍谷大学大学院NPO・地方行政研究コース特別シンポジウムを開催させていただきます。NPO・地方行政研究コースを代表いたしまして大矢野先生に一言ご挨拶をお願いいたします。

大矢野 NPO・地方行政研究コースの一教員として、代表して挨拶をさせていただきます。龍谷大学では関西圏を中心にしまして自治体、NPO団体と相互協定をむすび、職員を推薦していただき、大学院NOP・地方行政研究コースの院生として迎える制度

を設けております。今日登壇なさる皆さんは、この制度にのっとり自治体やNPO団体から派遣されてきた方々です。本コースは、こうした推薦枠による院生のほかに学部卒、留学生あるいは社会人で受験されて入られた方々など、多彩な経歴をもった人たちが構成されています。

本コースの設置目的の一つは、このように多様な分野の人たちが共通のテーブルを囲み、これからの分権社会をにう豊かな能力、すぐれた資質をもつ「地域公共人材」を育成していくことにあります。大学の中に、皆さん方のように現場で創意工夫をこ

らしながら地域課題にとりくんでいらっしゃる人たちを呼び込み、大学がもつ各専門分野の知見とインターフェイスすることで、実務と理論を架橋しつつ、新しい地域公共政策のあり方を一緒に考えていこうという試みです。

今日のシンポジウムの趣旨ですが、このコースには、全国の先進的自治体の首長やNPOの責任者の方などをお招きして、公開講演と院生の皆さんとの共同討議をおこなう科目（「地域リーダーシップ研究」「先進的地域政策研究」）があります。今日のシンポジウムはこの科目の一環にくみこまれておりますが、ただ今回は、外から講師を呼ぶのではなく、院生の皆さん自身、1年の終わりにあたって自主的に企画し、自主運営で公開シンポジウムを実施したい、と申し出があり、私どもが喜んでそれを受けたということでございます。

このシンポジウムの企画・運営にかかわった院生の皆さんは、院終了後、所属されている自治体やNPOにもどられ、地域政策をになう当事者になるわけです。今日のテーマは「NPOと行政の協働を考える」ということですが、このシンポジウムは、現場に帰られたあと、この1年の成果をどのように生かしていくか、その構想あるいは決意表明の機会でもあります。

日頃は、教師陣がリードしながら授業を引っ張っていくわけですが、今日のシンポジウムは、分権で言えば権限移譲をしたということで、これは大事なことでありますが、若干、私からしますと公開の場で皆さんがどういう発言をなさるか、期待半分、不安半分でございます。今日は1年間学ばれたことを大いに議論していただきたいと思ひますし、同時に今後このコースがどう

いう展開をしていくべきか、大学に対して率直な意見を出していただければと思っております。

今日のスケジュールですが、皆さん方の発言が終わった後、ゲスト・コメンテーターとして網野俊賢さんに来ていただきました。網野さんをお招きするのも、院生の皆さんの発意だったわけですが、網野先生は関西国際大学客員教授で、元ホンダオブアメリカの副社長をされた方です。日本半分、アメリカ半分、今も行ったり来たりでご活躍ですので、グローバルな視点から、こういう大学院コースのあり方についてお話を伺えればと思っています。会場の皆さん方と議論ができる時間も設けておりますので、会場からも意見を出していただき、一緒に議論ができればと思っています。

なお、NPO・地方行政研究コースがどういう活動をやっているか、資料として昨年度の「地域リーダーシップ研究・先進的地域政策研究」での公開講演をまとめた冊子がございます。このコースの活動の一環ですので、後ほどじっくり読んでいただければと思います。また本コースでは、ニューズレター『グローカル通信』を年4回発行しています。これは院生を卒業された方、提携先の方、このコースに関心を持っていらっしゃる方をつなぎながら、このコースをより発展させるための媒体と考えておりますので、これも後ほどご覧いただきたいと思ひます。

市田 それでは、ただいまからシンポジウムを始めさせていただきます。コーディネーターを務めます経済学研究科の平尾剛之にマイクを渡します。

平尾 皆さん、こんにちは。経済学研究科の平尾と申します。今日はたくさんお集

まりいただきましてありがとうございます。昨年の4月に大学の門をくぐってから、講義を受けて単位をとって論文を書いていく。厳しい状況の中でここまで来ました。この場を晴れやかな気分で実施したかったわけですが、今日午前中、口述試問を受けたメンバーもおります、論文の提出が1月19日が締め切り、年末年始があったのかどうかさえも記憶に定かでない状況の中で本日を迎えております。私自身も口述試問がまだ終わっておりません。経済学研究科が5名、法学研究科が5名、合計10名、第4期の院生として龍谷大学で1年間一緒に学んできました。

このコースが始まって4年たちます。何か院生から発信できないか。学ぶだけでなく社会人として発信できるものがあればと思ひまして、これも講義の一環として受けていただきまして、このシンポジウムを実現することができました。大学側にお礼を申し上げたいと思います。夏休み前、シンポジウムを院生企画で持ちたいとお願いしまして快く受けていただき、実現したわけです。

今日は、「NPOと行政の協働を考える」という大きなテーマですが、行政マン、NPOの関係メンバーの、1年間を通じての協働のタネのようなところを皆さんに感じ取っていただけたらありがたいと思います。

NPO関係者、行政マンの中でも直接、協働に携わる部署、行政とパートナーシップを推進する窓口のメンバーではありません。NPOとは何か、行政マンはどんな仕事をしているのかということを探りながら1年間過ごしてきました。「平尾さん、どうやってご飯食べてはるのん?」「NPOの人はどうやって食べてはるの?」という問い掛

けの中から、箸とお茶碗を持ったところからのスタートでした。現時点でもどこまで「協働」ということが共有されているか、難しいのですが、1年間のさまざまな場面での討論、会話を通じて、大きなところでは理解があり、つながりが持てたのではないかと思います。本日、登壇してますメンバーは10人のうち、よくしゃべる人たちを揃えていますので、ゆっくりお話を聞いていただけたらと思います。

この1年間、何を得たか

平尾 1点目は、社会経験やフィールドも全然違う場面で仕事をしてきた者が1年間、同じ空間を共有してきた。その中で大学から何を得ることができたかに論点を絞ってスタートさせていただきたいと思います。この1年間、大学で何を学び、自分の中で何を得ることができたか。大和さんからお願いいたします。

大和 皆さん、こんにちは。法学研究科の大和でございます。職場は大阪府守口市役所で都市計画課に所属しております。30年間の行政経験がございしますが、一貫して土木技術職としてすごしてきました。土木技術職というと範囲が狭い。都市計画法の範囲の中での知識しかない。行政の中でも狭い範囲の経験しかありません。ただし専門職ですから、都市計画の分野では自分がすべて正しいだろうと思ってやってきたんですが、たとえば新聞を賑わせています京都で言いますと景観にまつわるお寺とマンションの争い、住民運動とかありますが、法律だけで解決というのは、ちょっと違うのではないかと、感じていました。

職場では高年齢化の傾向があります。守口市では、一時は50歳以上が80%近く占めたことがあります。退職者が出まして、いまは50歳以上が60%程度かと思いますが、職場で2007年問題が起きてくる。団塊の世代の方々が退職したらどうなるか。ゴボッと抜けるわけです。50歳以上が60%、団塊の世代は近々退職です。団塊の世代の一斉退職問題は消費税、税負担、年金の見直し集中する中で、大きな社会問題でもあるわけですが、自治体の中では、我々が先輩たちから学んだ経験をいかに継承していくかということに大きな問題がある。先輩たちが培ってきたノウハウを次の世代に伝えることが我々の役目かなとも思っております。

都市計画においてもさまざまな問題を解決できる能力を持った先輩がおられます。しかし残念ながら、その中でもある固まった層が、役所の前例踏襲主義、ことなかれ主義で、あまりやる気がない。このやる気がないことについては意識改革をしないとイケない。そのためには専門知識だけでなくいろんな知識を豊富に持っていないとイケない。都市計画だけの狭い範囲の知識をいくら勉強しても意識改革にはならない。古手のやる気のなさを解決して次の世代に引き継ぐために、少しでも専門分野をこえた知識を得ようと、今回、こういう機会をいただいたので手を上げた次第です。

大学院に入ってびっくりしました。都市計画に関しては自信もあり、思い込みも激しかったのですが、やはりというか、先生方のご指摘もございまして、今までの見方がいかに狭かったかを痛感しました。

今日のテーマは「NPOと行政の協働を考える」ですが、大阪ではまちづくりに関す

るNPOは、あまり盛んではありません。「NPO、非営利の組織、そうか、ボランティアの精神の愛と無報酬でやってはる、崇高な話や」というところから入ったんです。行政経験が長いだけの者にとっては、NPOの職員の皆さんとの出会いは非常に勉強になりました。

平尾 大和さんの問題関心は、長い行政経験の中でも仕事のスタンスが限定されてくる。少し風を変えるために大学で勉強する気持ちになったということですね。どういう点を、より強く学ばれたかということについて、少し具体的に。

大和 NPOと行政のやる仕事分野はほとんど共通しています。NPO法人の活動は17分野、まちづくりに関すること、環境に関することなど、項目を並べると、自治体とほとんど一緒なんです。しかしながら、やっている範囲が違う。範囲が違うが、項目は一緒。両方ともに社会的責任を重く課せられているわけです、行政であろうが、NPOであろうが。それが第一点。

技術職の中でも私はわりと広い範囲で職場を回ったつもりですが、他の行政の方々、自治基本条例、基本条例を作成されていて「こういう問題に対して、こういう処理の仕方がある」と。たとえば守口の場合、密集で狭い面積の中で15万人の人口です。密集すれば、当然、トラブルも起きやすくなる。その中でどのように秩序ある地域社会をつくっていくか、ルールはどうあるべきか、その方策を考えるために真剣に学ぶようになった。首長さんはじめ先進的リーダーの方々、行政の方々の話を聴かせてもらったことは大変勉強になり、また先生や外からの講師の方々と一杯飲みながらホンネを語ったことも大変刺激を受けたと思います。

平尾 次に藤井真知子さんからお願いいたします。

藤井 皆さん、こんにちは。法学研究科に学ばせていただきました甲賀市職員の藤井です。私が学んだことを3点ほどお話ししたいと思います。

甲賀市は2004年(平成16年)に合併しました。それまで大学との連携協定に基づく人材育成は行われていなかったんですが、たまたま平成18年度、協定を結んで誰かを派遣するということになった。年齢的にも「限界かな、ここで応募して行けなかったら学ぶ機会はないかな」と思って受けてみました。今日、横に並んでいる3人の中では一番若いということがわかりました。まだまだ限界ではなかったのではないかと思います。

私は法規担当しておりますが、体育大学出身で、法規にかかわったことはありませんでしたが、2000年、分権の時に初めて法規担当係長になり、「これはどうするのか」ということを合併の前から考えてきました。大学院法学研究科に私を派遣することに、市の側も不安はあったと思います。私も不安がありました。でも大学に来て、大学院がどういうものであるか、学部とは違うことを痛感しました。しかし自分がやりたいことを研究すればいいという、自分なりの考え方で大学院に通うことにいたしまして、最初の不安はすぐに解消され、このコースが修了する時には私が一番このコースで楽しんでいたというのは、教授も院生も認めるところです。

ニュースレターにも掲載されていますが、大学コンソーシアム京都が主催する「京都から発信する都市政策」で、私が知事賞をいただきました時のコメントを書かせてい

ただきましたが、私がこのコースで学んだことは、政策をフィールド、現場や地域から発信すること。事件は現場で起こっている。事件を解決するには現場に100回行くという鉄則から「政策を考えるのはフィールドだ」ということが、私が大学院で一番学んだことです。ある意味で現場を持っている職員は強い。学者、研究者は机上の空論と言われて、理論がなかなか実践で役に立たないということが指摘されていると思いますが、このコースには、実践に役に立つ研究をさせてくれるところだと思いました。

2点目は、自治体職員が組織の一職員として意見や提案をしていく中で、現場でああでもない、こうでもないと言う。しかしなかなかトップや組織に受け入れられない。そのグチをグチで終わらせてはいけない。本当に改革をするためには理論的に論文で提案していくことが組織を変えていくことになるのではないかとということが2点目に学んだことです。つまり、説得力をもった論理を身につけるということです。私が書かせていただいた論文の中に「政策法務室を設置してほしい」という意見を書いています。組織の方もそれを認めてくれて、来年度の組織改革には私の意見も採り入れられるのかなと期待しています。まだ確定ではないのですが。

3点目は、私は46歳で大学生の二人の子どもがいます。京都の大学に通っていますが、二人とも下宿して自立しました。私は論文を年末年始、正月返上で書いていて、息子たちは下宿から帰ってきたんですが、「邪魔になるので帰れ」と言うと、さっさと帰ったんですね。二人の息子は自立したんですが、なかなか大きな息子の方が自立しませんで、1月3日にはパソコンを壊す。

このように、私の論文の邪魔などしていた夫が最後はカレーをつくれるまでに成長してくれましたので、こういう面でも成果があったと思っています。

平尾 大きな成果を発表していただきました。我々も入った時は大学の先生は上の立場におられる、我々は学ばせていただくというスタンスでした。藤井さんがおっしゃるように、我々は現場しか知らなかったわけです。現場は見えるが、他のことは見えない。一杯いろんな課題が隣にあるのに、隣にある課題に気づかないことがある。それを広い視野から見ていただくことによって「なるほど、この問題はこことつながっていて、こういう解決の糸口がある。その解決の糸口は、すでに違う場面で解決され、研究され、実践発表されている」ということが見えるようになりました。自分の中で「先生が言うておられることはちょっと違うのと違うかな」と思えてきた頃から本当の勉強をできるようになってきたのではないかと思います。「先生、すごいな、雲の上やな、上過ぎて見えへんわ」ということから、だんだん「雲が近づいてくるわ。糸が垂れて下に降りてきはったわ」という、なんとなく「先生が言われること、現場の経験をふまえてみれば違うかな」と。現場を踏んできたという実績と自信で、きちっと裏打ちされた中に、どういう学問的な研究体系が積まれてきたということが、ここで学んできた一つの大きな成果ではないかと思います。では藤野正弘さん、お願いします。

藤野 皆さん、こんにちは。法学研究科の藤野と申します。仕事はきょうとNPOセンターで職員として働いております。午前中、論文の口述試問がありまして、1時間にわたりましてみっちりとしごかれました。

ボコボコにやられまして、ちょっとテンションが前のお二人ほど上がらないということで冒頭にお許しを願いたいと思います。半面、ここにいる我々が「公開の場で何をしゃべるかわからん。期待半分、不安半分か」と言っていたいたので、「そんなら不安をしゃべったるか」と思っておりますので、口がすべるかもわかりませんが、お許しいただきたいと思います。

実は、事前にシンポジウムの打ち合わせをやったんですが、最初のワンクールは一人10分。前の二人がようしゃべるからお前は調節弁でしゃべれと。ことに反して大和さんも藤井さんも5分くらいでした。私がおその分、長くしゃべることはできない性格ですので、用意したものをしゃべらせていただきたいと思います。

私はきょうとNPOセンターで勤務しております。それ以前は32年間、企業に勤めておりまして、途中でリタイアしてNPOの世界に移ったという変わりもんなんです。NPOというのは概念的にはつかまえにくいかもしれませんが、福祉、環境、まちづくり、国際平和と、いろんな分野でNPOの方が活躍されています。私どもきょうとNPOセンターは分野や領域を超えてサポートしていこうというNPOでございます。NPOのためのNPO、中間支援といわれるNPOです。日頃やっていることは、NPOを知らない人を対象に講座を行ったり、NPOのためのマネジメント講座をやっております。私どもが京都市から委託を受けております京都市市民活動総合センター、そこで市民の方のご質問、ご相談に応じているというのが主な仕事でございます。私自身のタスクは、一つはNPOと企業のパートナーシップをサポートする事業を行っています。どうして

もまだまだ力が弱いNPOが企業と対等に協働できることを模索してサポートができないかと、仕事をしております。そんな関係で、論文も「企業の社会的責任（CSR）とNPOの役割」ということで書かせていただいたんですが、結果的にはボコボコやったということは、申した通りでございます。

大学院で何を学んだか。前のお二人が立派な動機、モチベーションをお話されたんですが、私は決して立派なことは何もなく、こういうコースがあるということを職場で知りまして、「面白そうやないか。楽しんでこよう」とコースに入らせていただきました。行政から来られた方は、一緒に勉強していても真面目だということはよくわかったんですが、私自身は崇高な動機で来たわけではありません。

ただ私の大学時代は政治の季節でしたので、ほとんど勉強というのはしてないですね。中にはしていた人もいますが、私のように流される人は、そんなに真剣に勉強してなかったので、このコースに来て、「これが勉強だ」とわかりまして、これだけ勉強したことはなかったです。大学4年間で図書館に行ったのは数えるくらいだったのが、今、1日8時間、平気で机の前に座って勉強することができました。この楽しさを教えていただいたことはありがたかったです。火をつけていただいた。1年でこの火が消えるのはもったいないな、何かの形でまた楽しませていただきたいなど。基本的には不純な動機で来ながら、なおかつ楽しませていただいたということで、ありがたいと思っています。

もう一つは実践している、現場を持っていることは自信にはなっていますが、それが半面、いい意味でも悪い意味でも、こび

りついていて、論理的な考え方がなかなかできない。大学の先生は机の上だけで実践に役立たない。その半面、我々は学校の勉強も知らずに現場を振りかざしてやってきた。それはそれで正義も大義も一定程度あるんですが、理論に裏打ちされたものがなかったのも、ともすれば徒手空拳、無手勝流になっていたかなと。そこを理論的に整理する、論理的なものの考え方をするのだということを学んだのが、この1年でした。

論文の話ですが、どうしても我々が書いたものは評論だと。それは論文ではないと。自分の思いと経験を書いているだけで、「論文とは、過去の先行研究を徹底的に精査し、それに批判を試みて新たな自分の論を展開するものだ」と。現場感覚があると、つい結論にジャンプしてしまうんですね。その間のプロセスができていない。教えを請いながら、そういうことができていなかったこと、先生方には至らぬ院生としてお詫びするしかないんですが、そういうことを学ばせていただいたことが役に立っております。

このコースの特徴だと思いますが、NPO・地方行政研究コースということで、私にとっては行政の方と接する機会は仕事以外ではなかったのです。企業の時代はまるきりなくて、今の仕事も一部の行政の人としか接点がないんですが、ここへ来て、行政の方の院生と幅広く議論ができました。行政の方のものの考え方的一端がわかったような気がします。

正直に言いますと、行政の方は全般的にNPOのことを何も知らないな。何も知らないわりに協働、協働と言うてはるがあることがあって、NPOにも言えることですが、NPOと行政が本当に協働と言うなら、まずお互い

を知り合うことではないか。NPOはもっと行政のことを知らないといかん。行政もNPOのことをもっと知らないといけない。そういう意味で、このコースで一緒に討論できたことは貴重でしたし、こんな機会は他の大学のコースではないのではないかな。それはプラスになりました。惜しむらくは、現場出身の院生が5人、10人という、あくまで点でしかなく、面的な広がりにはいたっていない。まだまだNPOと行政は点と点でしか結ばれていなくて、面と面で結びあうようになったら協働はもっと進歩すると思います。このコースだけでそれを望むのは無理かと思いますが。以上のようないくつかの点で、龍谷大学の大学院で学ばせていただいたことはよかったと思っています。

平尾 ありがとうございます。来年からこのコースで学ばれる方、来ておられますか？ ぜひ頑張ってくださいと思います。行政の方、NPOの方、完全に割れた形で集められていますが、藤野さんの話にもありましたが、パートナーシップで事業を起こそう、行政マンが出てきて「さあ、パートナーシップで協働を。協働してください」と言いますが、「何を協働させようと思ってるのかな、この人らは」と現場では思っていました。大学院で勉強し、講義の中では関心のないテーマも出てきます。これまで関心のなかったテーマに関して議論し、どこを突っ込んでいいかわからない中で、むりやり突っ込んでいくような感覚で、互いにすりあわせし、切磋琢磨しながらやってきたことで、実は協働のタネを、そこでつくってきたのではないかな。形だけで、NPOの関係者を集め、行政マンが出てきて「一緒に協働をやりましょう、協働って何ですか？」というところからスタート

しても、なかなか難しい。それも一つの方法論かもしれませんが、そうではない場面をこの大学のコースに関しては、その一端を与えていただき、現場に固守しない、理論的な展開を見据えたものとして学ばせていただいたのではないかと、3人の方の話からうかがうことができました。

本コースへの期待と課題

平尾 さて、第2点ですが、このコースは我々にとってどういう意義をもっているのか。我々はその意義にどれだけ応えてきたか、ないしは応えられなかったのか。このコースに関する課題、我々の課題でもあると思いますが、そこに少し論点に絞って発言していただきたいと思います。

大和 我々は1年間で修士を修了する。簡単なのかなと思っていたら、学部から上がってこられた院生の方と、必要単位は同じです。プラス論文がある。いきなり先生方から「論文をそろそろ始めないといかん」と。「ここは論文至上主義や」と、先程私が言ったこととは全然違うなど最初に思いました。今も、そう思っている部分があります。しかしながら藤野さんが言われたように、お互い、何も知らなかった、我々社会人院生は何を論文に書けばいいか。評論的なものになりがちですが、その論文を通じて、この人は何をやっているか。何を考えているかが、よくわかるんですね。「論文至上主義も捨てたものではないな」と思っています。その一方、課題という点では、社会人院生でも2年間はいただきたい。これは私の素直な意見です。

先ほど出ました、「京都から発信する都市政策」で、隣の藤井さんは京都府知事賞、

藤野さんが立命館大学賞と立派なものを残されました。さて私は何を残そうか。この大学にもう1年残ることになりました。後ろからポンと肩を叩いていただきましたらビールの1本でも出ると思いますので、次の院生の方、よろしくお願いします。一緒に学ぼうと思っています。

私が思ったのはくりかえしになりますが、2年は欲しかったなど。先生方は机上の理論だけではなく、実際に現場を経験された先生も多くて「なるほど」と。このコースには社会人院生だけでなく、学部から上がってきた若い院生も同じくらい数がおられます。私たち社会人院生が学部から上がってきた若い院生に、よい影響を与えたのか、いや、そうでないのか。楽しくワイワイいいながらやっているんですが、実際には聞いてないので、そのへんはわからない。しかし1年で、ご尽力いただいている先生方に感謝していますが、社会人院生は夜間の第6、7講時を中心に配慮していただいているのはありがたい。ただ2年間にしていただきたいということと、論文至上主義を、私はいい方に解釈しておりますが、今度入られた方が、どう考えられるか、今後の課題だと思っております。

平尾 学部から上がってきた院生と同じ学びの場面がありました。社会人は、ようしゃべる、学部から上がってきた人は突っ込んでいくのが難しいという場面も多々あったのではないかと思います。後で学部出身の方にもご意見を聞かせていただきたいと思います。

藤井 院に来させていただいた時、学部と院は違うと。私は学部と同じようなつもりで来たんですね。基礎的な法律的な知識が得られれば、法規担当としてもそれなり

の基礎的知識が得られるのではないかという思いがあって。しかし、いざ来てみると、大学院は研究するところであった。そのへんは戸惑いがありました。ただ1年間で2年分の単位をとる。授業に出る回数が多く、滋賀県甲賀市、甲賀忍者の里という田舎です。そんなところから2時間かけてこの大学に通うことは、かなり体力的にも大変でした。その点は体育大学出身であったことから乗りきれましたが、授業を受けることはなかなか大変でした。

合併してすぐ指定管理者制度が導入されました。NPOはどういうものかよくわからない中で、条例をつくって執行してきました。この1年間学んだ中で、NPOというのが私が思っていたこととは全然違っていたというのが実感です。指定管理者制度の条例をつくったこともあり、「NPO総論」の授業をとりたかったんですが、日数的、時間的な関係でとれなかったことを残念に思っています。ただ院生の中から感じ取ったものはありまして、それをもとに今後、大学のどこで何を学べばいいかというのはわかりましたので、一人で頑張って勉強すればいいのかなと思っています。

1年間で2年分を修了するのが龍谷大学のこのコースの特徴ですが、大和さんの「2年あれば」という意見に反対ではなくて、私も2年あれば、もっと学べたと思っています。ただ家族の理解も得られるかどうか第一にありましたし、もう一つは職場の理解が得られるか。これは一番大きいと思います。2時間通うために仕事を1時間早く切り上げさせていただき、ここに来させていただく。仕事を1時間分、放棄しますので、その分をどこで返すか。土曜日も授業がある。論文も書かないといけない。土

日を返上して仕事をするわけにもいきませんので。二人の係で誰にしわ寄せがいったか。もうひとりの男性職員にいったのはいうまでもありません。部長や課長にも迷惑をかけたと思います。職場には理解していただいて、今回、論文を出し終わった後、「これですべて終わりました。ありがとうございます」と部長と課長に言うと、「卒業できたら皆でお祝いしないとあかん」と言ってくれました。部下の職員も「お疲れ様でした」と。「いい職場に恵まれたな」と思いましたが、それが本当に皆さんの中で得られるかどうか不安がありますので、1年のコースは社会人にとって魅力であることは確かです。

もう1点、コースに期待すること。修士論文にも書きましたが、少子化で大学のあり方、教育のあり方が問われています。その中で大学が今までは教える機関、教育機関であったところから、これからは生涯学習の時代、生涯学習を支援できる機関でなければならないと1年間で思いました。特に自治体職員は3、4年で人事異動して仕事を変っていきます。1つの仕事を長く続いていくことはない。そこで知識、技術を支援するのが大学であってもいいのではないかと考えています。このコースもそうですが、このコースだけでなく、大学自体が、それを受け入れていただければありがたいなと思います。

また、家族には感謝してしまして、夫にはパソコンは壊されましたけど、支援してもらったし、職場にも支援していただきましたので、この場をお借りして感謝の心で「ありがとうございました」ということで、お許しいただきたいと思います。

平尾 藤井さんは体育大学を出て体力が

あってよかったねということだけではなくたと思います。1年間で2年間の修士のコースを学びきれんかどうか、大きな課題だと思います。職場の理解がどれだけ得られるかということも大きな問題ではないかと思います。私自身も推薦いただいた団体が本職ではありませんで、私は京都新聞社会福祉事業団で18年目を迎えています。行政のように1時間早く帰るということは一切ありません。残業も10月、11月は平気で60時間～70時間やっていました。休日出勤もしていました。大学の授業も、ごめんなさいをしていました。そういう状況もあった中で、1年間でどれだけ学びきれんか、課題として「本を100冊読め」と。マンガやったら読みますけどね。内容も難しい。読み切るまでいかず、はじめの数ページを読んで、読んだ気になるということもあったのではないかと思います。機会は与えられたが、物理的に時間を自分で確保しないといけない。学ぶ機会は与えられたわけですが、時間は限られています。

これに関しては我々、共通の課題でもありました。どうやって時間をひねりだしていくか。藤井さんは家族に感謝していますが、私は家族にボロンションに言われていましたから。「いつになったらご飯つくってくれるのや」と。そのへんは難しい問題だったなと思います。そのへんはうまく自分の中で時間をつくっていかないといけないということではないかと思います。

藤野 ここに藤井さんのだんなさんが来られてしまして、公の席を借りてコミュニケーションを図っているのかなど。コミュニケーションをとられているのは常々羨ましいなと思っていました（笑）。

課題の前に、まず、ありがたさを言わせ

ていただこうと思います。たまたま今回、法学研究科5人、経済学研究科5人合計10人が社会人だったのですが、この中で、修士号をとりたいから来ている人は、まずいないんじゃないかと思います。私も修士号がほしいから来たわけではないのです。1年で出させてやろうという大学の配慮は痛いくらい感じました。6、7講時、18時半からの授業、土曜日の午前、午後の授業があって、そういうカリキュラムを組んで何とか社会人の院生をエンカレッジしようとしていただいたことは感謝しています。授業につきあっていただいた先生方も普通の学部生以外の時間をとっていただき、自分の研究時間も潰していただいたことはありがたかったと思います。その背景には社会人の経験というのを、一定程度、評価してもらい、カリキュラムを組んでいただいたことがあるかなと。そういう意味では甘えさせていただいたことも事実なんです。

しかし、実情はそれほど簡単ではなく、今年4月から来られる人は、それなりの覚悟が必要だと思います。私も職場で理解はもらっていますが、行政のように1時間早く出ていいということはありませんでしたので、8時半～17時半まで、びっちりこなして、その後、このコースに来るためには体力的にも精神的にも結構ハードでした。瀬田に社会学部のコースも一つとってしまして、瀬田に18時半に行くのに17時半に終わって17時50分の京都駅の電車、18時07分の瀬田のバスに間に合うためにピンポイントです。なかなか時間通りに出られませんので、走って京都駅までいったこともありましたが、それくらいの覚悟がないとできないなど。それに応えるだけのカリキュラムを組んでいただいたことはありがたいし、

他の大学院では1年の修士コースはありませんので、龍谷大学のこのコースは誇っていいと思います。

反対に1年という限界はあります。論文を出すことがメインになりますので、私自身は学ぶことは楽しいということで、もっといろんなことを学びたかったなど。ほとんどが論文のための授業だったので、いろんな人の思い、課題、研究方法を聞かせていただくことはプラスになりましたが、もっととりたいコースはありました。昼間のコースでいい授業がとれなかったのが、ちょっと残念で、2年あってもいいかなと。職場の理解と家族の理解、大学の理解が必要だと思いますが、2年あればもっと充実できたかなと思います。

いろんな人々、行政の方と喧々譁々やったり、学部からの若い皆さんと、子どもの世代の人とともに議論できたことはありがたい経験でした。若い人の意見を聞かないといけないのですが、社会人がどんどんしゃべって、若い人たちは4、5月頃、ほとんどしゃべられませんでした。しかし10、11月になると自分の意見も言われていましたので、我々がうまく持っていけたのかなと、勝手に自負しております。

課題を整理するとすれば、2点あるのではないかな。折角いい仕組みがありながら、システムとして機能していないのではないかな。もっとたくさんの人が入ってきていいのではないかな。行政とNPOが、点と点としてしかつながっていない。面と面になるくらいのスケールがあればいいなど。もう一つは、1年修了した後のフォロー、できたら継続的にモデルケースの例をフォローしていただくとありがたい。論文の口述試問の時、言われたんですが、「もっともっと

深める研究をしてほしい」と。自分の力でやっていくにしても、大学側にもフォローするシステムがあればいいかなと思います。

平尾 このコースが4年前に始められ、5年間が経っていますが、大学側としてはすごいことだと思います。京都のR大学、D大学とかありますが、このコースを維持できるだけの財政的な問題、先生の価値観の問題とか、大学の運営の問題、いろんなことを超えられて5年間継続して維持されてきたことはすごいことだと思います。ここで勉強させていただいたことを職場に持って帰り、そこで頑張れば、大学にとってもいいことだと先生はおっしゃるんです。それじゃ、あまりにも大学はカッコよすぎるじゃないか。「後追いをしない。後は皆さんが頑張る」と。それだけでは折角、龍谷大学のNPO・地方行政研究コースで学ばせてもらったネットワーク、社会資源としての有効活用にならないのではないか。

同じコースで学ばせてもらったメンバーが4年継続していますので、これをいかに有効活用するか、社会資源として大学側から少しシステムの提示をいただけると、我々もここで学んだというアイデンティティを確立して、維持していけるのではないかと思います。それに対して我々が協力できることを明確に出していただくことによって、もっと大きく龍谷大学で学んだよさが、我々の中からも発信できるのではないかと思います。

もう一つの側面として、推せん枠の場合、学費が免除されますが、大学にとって、これがこれから継続することを可能にする要因としてどうなのか。これは大学が考えられる課題かもしれませんが、NPO・行政コースはお荷物だと考えられていないのかど

うか。タダだから1年で出てとされているのではないかなと思うわけです。それをプレッシャーにして、バネにして修士論文を書くということもありますが、そこに大学側から大きな手が見えてこなかった。「後追いはしない。お金はサポートしてくれる。地域で頑張れよ。そんな都合のいい話があるのかな」というのが、素直な受け止められ方ではないかもしれませんが、そういうことも含めて、このコースが発展的に持続していくために何が必要か。我々も修士生としてかかわっていき、意見を言っていくべき一つの課題ではないかなと思います。

我々の中でそういう意見が出ていたということも、この場でのべておきたいと思います。ただ、教員としての立場もありますし、大学側の立場もありますので、それをどう精査されているか。そのあたりが我々には届いてこないの、それを明確にしていきたいながら、この人的資源をどのように有効活用されるか、そこにまた我々もこれからの進むべき道があるのではないかなと思っています。

最後に一言ずつ3人の方からお願いいたします。

大和 大学で身につけたものを職場に持ち帰って情報の共有をしないと職場の意識改革はできない。いつまでも前例踏襲、ことなかれ主義では自治体は変わらない。できるだけ先生方から与えられたものを持ち帰ってと考えています。個人的には、行政について、NPOの方や先生方から、ボロくそに言われても「なにくそ」と思いながら、私は私なりに議論を展開してきました。さまざまなことを飲んで熱く語り合ったのはよかったんですが、語り合った内容は翌日すっかり忘れているという、とんでもない

ことで。学んでよかった点は、ここにおられる方々と生涯にわたる友だちができた。これが一番の財産だと思っております。

藤井 1時間、職場を抜けさせてもらったことが当然のように聞こえた部分があるかと思います。NPOの人たちは時間通り仕事をしていたと。そのあたりについて補足しますと、滋賀県の地理的条件の中で、この大学の通うことを可能にするために1時間抜けないと通学ができないという状況にありましたので、最初の協定でありましたように大学に1年間通うことを支援する中で、人事の方で職務免除の制度を利用して編み出した苦肉の策でした。このことで私なりに一生懸命やってきて成果も認めていただき、来年からも大学院で学ぶことを支援していくことになりました。今回、公務員法の中で部分休業制度という給料をカットして大学で学べるという制度があります。国の法では制度化されて2年になりますが、それを新たに3月議会で提案させていただき、部分休業を利用して大学院に行ける制度をつくりました。職務免除ではなく、自分に全部跳ね返ってきますので、自分の責任でやることになりましたが、こういう制度をつくっていくきっかけになったというのは、私もそれなりに大学院に来させていただいた成果ではないかと思っています。4月から来る院生、他大学にも2人、部分休業を利用して大学院で学ぶ姿勢を示しています。自治体職員がそうやって頑張らないと自治体が活気づかない。これから厳しい財政状況の中で政策をどのように活かしていくかが求められていると思うので、人材育成、職員研修を、全体研修でしていくのではなく、個々のレベルアップという意味で大学院を利用できたかと思っています。

す。

この院に学ばせていただいて、社会人の院生10人、まとまって修士論文についても励ましあいながら何とか提出できたということもあります。本当に一生の友を得た。学部からの若い学生さん、子どもと一緒にの世代の方と、私としては自分の子育てについても学生さんから学ぶことがあったし、学問としても学ぶことがあったということで、こういう機会が与えられるならば、ぜひ続けていただきたいなという思いです。

藤野 藤井さんを筆頭にして行政の方は時間をやりくりして授業に参加されていたと思います。私は京都からですけど、守口とか甲賀とか、近江八幡とか遠いところから往復の時間、授業に費やす時間を考えると、大変なエネルギーを費やされていたことに対して、素直に敬意を表したいと思います。

私も同じことを思っております。いい友人が10人できたと思っています。授業の中でもゼミ形式ですから討論があり、行政の方の考えに対して、私はNPOを代表するわけではないですが、NPOの考えを述べさせていただく。それに対してまた行政の方は「NPOのこういうところがおかしい、わからない」とバトルをやっておりまして、それを多くの先生方がニヤニヤしながら煽っていただいて、よけいバトルが燃え上がって、お互いを知る、いいきっかけになったと思います。そういうことを通じてホンネを言い合えるようになり、仲のいいグループとして今後も続いていくと思います。

一つだけバラしますと、2006年度生ということで大学がメーリングリストを立ち上げてくれて、いろんな連絡は行くんですが、公式なメーリングリストはきれいなことし

かお話にならないので、院生だけの裏メーリングリストをつくって表ではできない話を一杯しました。それが励みにもなりまして、情報交換ということではクイックリスポンスもあって「あの授業はどうだ」「論文を出さないといかん、何が足りない」「あんた、しんどいけど、もうちょっと頑張りや」ということがあって、私も助けられ、勇気づけられました。仲間との友情も今後、大切にしていきたいと思います。皆さん方には感謝しております。

平尾 ありがとうございます。裏メーリングリストは、土山先生の名前が「ちゃん」付けで呼ばれているだけの話ですので、たいしたものではありません。公開はしませんが、ご理解いただけたらと思います。今日は4期目の同期の院生が来ておりますので、一言ずつ発言してもらいたいと思います。コースに入られた感想など、4人の方から一言ずつ。

水流 私は大阪府守口市役所教育委員会に勤務しております。経済学研究科です。法学研究科には守口市役所の大和さんがおられます。二人で通学路は同じですので、いろんなことを話したり、助け合ったり、励ましあって1年間、頑張ってきました。もう1年残りますので、次年度院生になれる方、よろしくお願いします。

この院を受けた一つの理由は息子も大学受験ということで、いろんな大学の資料、予備校の説明会に行かせていただき、龍谷大学はすばらしい教授陣がいらっしゃる。ぜひそういう授業を受けたいという気持ちから、たまたま大学院のお話がありまして、だめもとで受けたのが合格させていただきました。すばらしい先生方も龍谷大学のカラーだと思います。龍谷大学は留学生も受

け入れています。中国、台湾、タイ、いろんなところから来ておられます。院生もいらっしゃる。ゼミをとった時、その方々がおられて、言葉が通じなかったらどうしようと。相手の方は日本語ペラペラなんです。中学、高校、大学で学んできた国々のことをこれまでとは違った意味で各国のことを知ることができました。それも龍谷大学のいい点だと思います。

私は行政の人間ですが、NPOについてはほとんど知らず、非営利組織という感覚だったのが、ここに来て改めてNPOの存在もわかりました。いろんな方々との話で視野も広がり、刺激を受けました。NPO・地方行政研究コースのいいところは経済学研究科、法学研究科、学部を超えて授業をとることができる。私は経済ですが、履修科目はほとんど法学研究科の方と同じなんです。私自身、大学の中で法律面のことを詳しく知ることができました。社会学にも興味を持っていますので、大学院の社会学研究科が瀬田にあります。社会学の人たちもNPO・行政研究コースに入ってもらえると、もっと視野が広がるのではないかとというのが私の感想です。教育現場は時代、年々によって変化していますので、今後、社会学部に関しても検討していただけたらと。欲張りですが、そういう面の学習、知識も増えるのではないかと思います。

私たち10人は仲がよく、この年齢になると本当のお友だちが見つからない。心の中を割って話せる、いろんな悩みを聞いてもらえる。プライベートなことでも励ましてくれました。躓きそうになると手を差し伸べて、大人ですからそういうことを待つのではなく、自分で立ち上がらないといけないのですが、どうしても立ち上がれない時

は誰でもあると思うんです。裏メールで助けてくれました。私自身もそれで勇気づけられて今日に至っております。私がこの1年間で学ばせていただいて感じたこと、勉強の内容以外にも得たものが多かったなということが、私にとってのメリットだったと思います。

南 近江八幡市役所から法学研究科にあります。皆さんがNPO・地方行政研究コースを振り返ってよかったこと、課題を上げていただきましたが、私のペースからすると、この1年間は時間がもっとほしかったなというのがあります。職場、同期の皆さん、先生方、ラッキーなことに恵まれた1年間でした。論文では、論理的に自分の現場のことを整理できたことも大きいのですが、この1年を契機として自治体職員として活かしていくことと同時に生涯学習としてのきっかけ、これから自分が行政職員としてだけでなく、違う分野や普段の生活の中でも大きな人生の糧になったと思っています。

木村 近江ネットワークセンター職員を5年しています。雇用関係は5年満了で終了になりますが、最後の年に大学院に寄せていただきました。センターではすでに2人、1、2期で若手を送りこんで優秀な成績をとって、次にいく人間がびびって1年空いたんですが、私も残り少ない人生を、ということで1年間の機会を持たせていただきました。もともと公務員でしたが、甲賀市民です。藤井さんに突っ込み入れながら一緒にさせていただきました。高校時代も学びながらアルバイトして月3、4万円のお金をいただきながら卒業したという、その後、もう勉強嫌いや、ということで出たんですが、2年ほどして知識を持ってい

ないと社会で通用しないと夜間大学に4年間通いました。その後25年、勉強をせずに今回、院に入らせていただき、何とか論文を書きたいと目標を持って教えていただき、学びをさせていただいたことはよかったと思います。それらしい論文にならなかったことに悔しい思いでございますが、少なくとも書いて出したというところまではとりつけた。

「NPOと行政の協働を考える」ということですが、ネットワークセンターは県の補助金が98%、あとは自分たちで稼いでいる程度ですが、その中で県の行政で思うんですが、NPOは行政のある一つの政策の中に一部分委託、補助金を出したということで「NPOと協働をやっている」と施策の中で並べられるんです。ネットワークセンターや市民活動の側からすると「そんなことはない」と反発し、政策の中でも「よくこれで協働施策事業だと言うな」と思うんです。

先般も、ある審査会に行きましたが、政策のつくり方、プロセスには一切市民、政策提案をするNPO機関を入れないで審査委員だけ来てくれればいいと。都合がいいとか。政策のプロセスの中で早い段階で意見を採り入れてつくっていく。委託を出した特定にNPOに出したいというのがあればいいんですが、その時でも施策事業の展開のあり方にも意見を採り入れ、施策をつくりあげる。実行の段階で、きちっと仕様書をつくって委託契約していく、補助事業をやっていくことをやってほしい。委員会に呼んだからと言って別に噛みつくわけではない。一緒にいい社会をつくろうという姿勢を、行政の人はもっと持ってほしいと思っています。

私の住む市が市町村合併しまして総合計

画をつくる。総合計画をパブリックコメントを出す。課長に「NPOから市民に対して一度でもいいから説明したか？」と聞いたら、「それはなかった」。「では、なぜパブリックコメントを求めるのか?」。ホームページ上に書類を載せてコメントを求めることに市民は慣れてないわけです。よくそれでホームページ上に「市民との協働」とか「市民が参加する市の市政」とよく書けたものだ。つくり方も業者に委託契約してコンサルタントが書類をつくる。そんな画一化されたものをつくって、市の総合計画だというのはどうかな、と思うんです。確かに形式的には市民が入って委員会で検討はした。だけど中身はコンタクトがたった。行政の職員主導で文言を書く。それでいいのかと疑問に思います。「市民との協働」というのは行政側から間口を広げてく姿勢、市の職員は大胆に切り込んでいって行政と市民との接点を増やしていくことがないと、協働はなかなかできないのではないかと感じています。

高井 大阪でNPO法人ノアックという団体で、青少年育成のキャンプをやっています。4人の常勤職員とともに1年通じて活動しています。このコースにはNPOの立場で入ってきていますが、NPOのこともまだ十分にわかっていない。行政のことも。この1年間、いろんなことを学ばせてもらいました。その中で自分たちの団体の中で自分が学んできたことを共有できる、会議の回数も増えました。今、1年間学んだことをもとにホームページをリニューアルをしています。非常勤でホームページのメンテ

ナンスをやってくれている者がいますが、「これだけのことをホームページに更新してほしい」と手書きで渡すと、「こんな大量だと1カ月以上かかりますよ」「1カ月かけてもやる」と時間をかけながらやっている最中です。それが今年1年の成果かなと感じています。

私自身が感じたコースの課題としては、実はNPO法人は土曜日、日曜日がかき入れ時です。活動の拠点が集中する日なんです。土日に通学することが、しんどかったというのが素直な感想です。職場の理解も必要ですが、かなりの負担を同じ職場のメンバーに今年1年かけてきましたし、「2年目はないですよ」というプレッシャーを与えられながらやってきました。そういう面で、次年度からそういう面も考慮していただけるコースになれば、もっと発展するのではないかと感じています。

私も協定している枚方NPOセンターから推薦を受けてまいりましたが、私もそのセンターに対して今年1年、学んだことを返していけたら、自分の地域を中心に幅広い人たちに学んだことを一緒に考えられることを、今後とも研究していけたらと思っています。

平尾 今期の院生からもコメントをいただきました。この後、網野先生から特別コメントをいただき、質疑応答、協定先の皆様から、来年度入られる院生の方からも、先生方からもご指摘、ご意見をいただきたいと思います。

市田 それではここで第1部を終わらせていただきます。ありがとうございました。